

令和 7 年度 能登訪問プログラムのまとめ

1. 2 日間の行程 (令和 8 年 3 月 29 日ー3 月 30 日)

3 月 29 日 (日)

羽田空港 8:55 → のと里山空港 9:50 着 → 輪島市門前町へ

昼食：門前町「はしもとや」 見学・講話：七浦地区「皆の宿」13:00～14:10

講話（オンライン含む）： 禅の里交流館にて宮下杏里さんのお話 15:00～16:30

宿泊拠点 17:00 到着 夕食 18:00 振り返り 20:00～22:00 就寝

3 月 30 日 (月)

朝食 仮設住宅でのたこ焼きイベント（阿岸第一団地）9:30～13:00

総持寺祖院参拝 13:30～14:00 のと里山空港 17:05 → 羽田空港 18:15 着・解散

2. 全体振り返り

令和 8 年 3 月 29 日から 30 日にかけて、本校生徒 3 名は、他校の生徒 4 名とともに、石川県輪島市門前町を訪れました。能登半島地震から約 2 年 3 か月、能登半島豪雨から約 1 年 6 か月が経過した今、災害の現場に触れ、災害とは何か考え、首都直下型地震をはじめとする災害への対応について、見学や交流・ボランティア活動を通して学び、田園調布高校生徒へ還元していくことを目的に、被害に遭った現地を訪れました。

初日は羽田空港からのと里山空港へ移動し、門前町に向かいました。昼食後、被災した空き家を活用し、帰ってくることができる場、人々が交流できる場、として整備が進められている宿泊施設「皆の宿」を訪れました。運営に関わる方からお話を伺う中で、家屋のガラス戸には腰の高さほどまで達した泥水の跡が今も残っており、豪雨の時はその高さまで水が来たことを、実際に指をさしながら説明していただきました。さらに、主要な道路が土砂崩れによって寸断され、地域が孤立した状況についてもお話があり、災害の規模の大きさを実感しました。また、立ち上げの経緯や被災後の地域の状況、復興に向けた具体的な取り組みについても詳しくお話を伺い、「地域を残したい」という強い思いに触れることができました。本校では、その思いに共感し、文化祭の収益金の一部をお渡しし、「皆の宿」の整備に協力させていただくこととしました。（現在、「皆の宿」は完成し、5 月 15 日より営業を開始しました。）



「“帰る場所を作りたい” 被災家屋が地域唯一の宿泊施設に 石川・輪島市の宿所「皆の家」オープンへ」

<https://news.ntv.co.jp/n/ktk/category/society/kt2ee81f113a8d463ea42d165666d1c176>

その後、七浦地区を後にし、「禅の里交流館」へ移動しました。交流館では、輪島市門前町で生まれ育ち、現在は門前町の町おこしに取り組んでいる宮下杏里さんより、震災当時の状況や復興に向けた取り組みについてお話を伺いました。震災直後は強い揺れにより家屋の倒壊や損壊が相次ぎ、電気や水道などのライフラインも途絶え、不安の中で避難生活を余儀なくされたことなど、当時の厳しい現実について具体的にお話をいただきました。また、震災後は人が集う場所が失われることで精神的な負担が大きくなることを聞き、人と人とのつながりの大切さを実感しました。震災から日が経つにつれて報道は減少し、被災地の状況は次第に忘れられていきますが、現地では今なお復興の途上にあり、多くの課題が残されています。こうした現実に触れることで、生徒たちは災害を一過性の出来事としてではなく、継続的に向き合っていくべき課題であると捉える機会となりました。また、この時間は東京ともオンラインで接続し、本校

生徒や保護者なども参加できる環境を作り、学びを共有する機会となりました。

夕食では、宮下さんも交え、笑顔が絶えない温かな時間となりました。能登の新鮮な食材を使った料理の美味しさに感動しながら一日を振り返る中で、生徒たちは門前町の魅力に引き込まれていきました。また、何気ない会話の端々に震災への思いや地域を大切にしたい強い気持ちが感じられ、地域の現状や復興への歩みをより身近に捉えることができました。

2 日目は、仮設住宅が並ぶ阿岸第 1 団地を訪れ、集会所にて地域の方々と交流しながら、たこ焼きイベントを実施しました。現在も仮設住宅で生活を続けている方が多くいる現状について知り、日常生活を取り戻すまでの道のりの大変さを実感しました。準備や調理、配布をともに行う中で自然と会話が生まれ、作ったものが「おいしい」と言われたことで、生徒たちは達成感と喜びを感じ、人と人とのつながる温かさを実感しました。参加された住民の方々と笑顔で言葉を交わしながら活動する時間は、生徒たちにとって心に残るひとときとなりました。

午後は、總持寺通り商店街を訪れ、買い物や散策を行いました。地域の方々と会話する時間が多くあり、震災後も地域の営みを支え続けている人々の思いや努力に触れることができました。帰る際には、「また来てね」と温かい言葉を多くの方々からいただき、生徒たちは、地域の方々の温かさを改めて感じる機会となりました。

3 生徒振り返り

生徒たちからは、「いつ起こるか分からない災害に備え、自分自身の防災意識を高めるとともに、本校生徒の防災意識の向上にも努めていく必要があると感じた」、「現地を訪れる前は復興が進んでいると思っていたが、実際には今も被害の跡が残っており、復興には長い時間がかかることを実感した」、「震災後は人と人とのつながりが大きな支えになることを感じた」、「人口が比較的少ない能登でも避難所運営に混乱が生じたことを知り、東京で大規模災害が発生した際の混乱は計り知れないと考えた」といった声が聞かれました。

4.写真

		
出発前	のと里山空港	他校生徒と初対面
		
皆の宿訪問①	皆の宿訪問②	禅の里交流館講話①

		
宮下杏里さんとの写真	夕食	朝の畑作業体験
		
畑から取れた野菜を一口	朝の門前の海	阿岸第一団地の土砂崩れの跡①
		
阿岸第一団地の土砂崩れの跡②	阿岸第一団地の仮設住宅	たこ焼きイベント
		
總持寺通り商店街①	總持寺通り商店街②	のと里山空港離陸前

6.まとめ

今回の訪問を通して、生徒たちは災害の現実を自分の目で見て、耳で聞き、人と関わる中で多くの学びを得ることができました。現地での移動中には、道路のゆがみやひび割れ、土砂崩れの跡が各所に見られ、災害の爪痕が今もなお残っていることを実感しました。災害は決して遠い出来事ではなく、いつ自分たちの身に起こるか分からないものであること、そして復興には長い時間と人と人とのつながりが不可欠であることを実感しました。今後は、この経験を校内で共有するとともに、首都直下型地震をはじめとする災害への備えについて考えを深め、自分たちにできる行動を主体的に考えていくことを教職員一同願っています。